

バハバイト・エル＝ハジャルにおけるイシス神殿の役割

—都市形成過程における信仰の影響—

大城 道則

要約：本論はナイルデルタの都市バハバイト・エル＝ハジャルに建造された古代エジプト最古のイシス神殿の歴史的背景を知ることにより、その後地中海世界で広範囲に展開されるイシス女神信仰の拡大・伝播のメカニズムと受容・変化のプロセスを明らかにすることを試みるものである。結果として、政治経済に基盤を置くことによって発展を遂げた都市が他地域・他時代には多いという現象と比較して、ナイル河流域で発展した都市は、政治経済の中心であるだけでなく精神的な拠り所である宗教拠点であった意味合いが強かった点を指摘する。イシス神殿を包含するバハバイト・エル＝ハジャルはその典型であった。古代エジプトでは、神々に対する宗教と信仰が都市の在り方とその盛衰を左右したのである。

キーワード：バハバイト・エル＝ハジャル、イシス、宗教拠点、デルタ、自然災害

はじめに

古代エジプトの創世神話のなかで、ヘリオポリスの九柱神の一柱に数え上げられる女神イシスは、個人の名前やその一部に使用されるなど、もともと王族のみならず庶民にも人気が高い神であった。しかし紀元前1千年紀に入ると彼女に対する信仰は勢いを増し、特にプトレマイオス朝時代とローマ帝国支配期になると、その影響はナイル世界の枠組みを超えて、全地中海世界、ヨーロッパ内陸部、さらに遠くブリテン島にまでおよぶのである。それは一種の世界的規模の社会現象の様相を呈していた。

しかしながら、冥界の王オシリス神の妻であり妹でもあったイシス神は、さらに古代エジプト王の化身であるホルス神の母親でもあるという古代エジプトにおける神々のパンテオンのなかでは重要な地位づけがなされていたにもかかわらず、信仰拠点となる神殿は決して多くはなかったのである。そのようななか、バハバイト・エル＝ハジャル (Behbeit el=Hagar) は、イシス信仰の一大拠点を形成していた。特にその中心的存在であったエジプトで唯一ほぼすべてが花崗岩で建造されたイシス神殿 (図1参照) は、ギリシア・ローマ世界でイセイオンあるいはイセウムと呼ばれ、「イシス神の殿堂」と称されたのである。



図1：現在では崩壊してしまったバハバイト・エル＝ハジャルの神殿（著者撮影）

バハバイト・エル＝ハジャルは、ルイ9世が第7回十字軍で捕虜として捕まったことでも知られる現代の都市マンズーラの約8キロメートル西、そしてナイル河のダミエッタ支流沿いにあるサマンヌード（下エジプト第12州都であり、第30王朝の都であった古代のセブンニトス）の約8キロメートル北東に位置している。そのためデルタ地域の拠点の一つであったそのサマンヌードに帰属する小規模な町であったと考えられることもあるが、確認されている神殿の規模と使用された石材の質を考慮するならばそれは考えづらい。バハバイト・エル＝ハジャルは、イシス神殿という聖域を包含しながら発展した独立した都市あるいは巨大で特殊な宗教空間であったに違いない。ゆえにバハバイト・エル＝ハジャルの持つ意味と古代エジプト史上における存在意義については、この地に建造されたイシス神殿の役割と機能について検討することで明らかにできるであろう。

古代エジプト最古のイシス神殿がバハバイト・エル＝ハジャルに建造された歴史的背景を知ることは、その後地中海世界（あるいはその範囲を超えて）で展開されることとなるイシス信仰の拡大・伝播のメカニズムと受容・変化のプロセスを明らかにする可能性を秘めている。そこで本論では第一章において、バハバイト・エル＝ハジャル遺跡とイシス神殿についての歴史背景を紹介する。続く第二章では、遺跡の現状と研究史を、そして第三章では、地中海世界全域に拡大したイシス信仰について、そして最後の第四章では、イシス神殿の存在意義とその役割について考えてみたい。結果として、政治経済に基盤を置くことによって発展を遂げた都市が他地域・他時代には多いという現象と比べ、ナイル河流域で発展した都市は、政治経済の中心であるだけでなく精神的な拠り所である宗教拠点であった意味合いが強かった点を指摘する。イシス神殿を包含するバハバイト・エル＝ハジャルはその典型であった。

第一章：バハバイト・エル＝ハジャルの歴史と自然災害

そもそもエジプト学を志すものであれば、デルタ地域の重要性は十分に認識している。しかしそれ以上にデルタ地域の歴史の再構成が困難であることも認知しているのである。デルタという土地の性質上、発掘は湧き出る水との絶え間ない戦いの連続なのである。必然的に考古遺物の保存状態も乾燥した砂漠地域と比べて悪い。近年水を吸い上げるポンプの性能が以前と比べて格段に上がったことから、デルタの遺跡も調査がかなりはかどるようになり、そのことはテル・エル＝ファルーカ¹ やサイス（サ・エル＝ハジャル）² での発掘調査の成果が証明してくれているが、まだまだエジプトの他地域と比べ発掘作業が困難であることは否めない。

紀元前5世紀のヘロドトスをはじめとした古典古代の叙述家たちによる様々な文書史料は、この地域の重要性について多くを語ってくれているが、それを裏づける考古学的証拠が著しく欠如しているのはそのためなのである。たとえばヘロドトスは、同じデルタ地域にあり、バハバイト・エル＝ハジャルから西へ約50キロメートルに位置する第26王朝の都であったサイスとその中心であるアテナ神殿（ギリシアの女神アテナは、サイスにおいては女神ネイトに相当する）、およびそこで行われた秘儀について、以下のように詳細に記述してくれている³。

「エジプト人はアプリエス（第26王朝四代目の王）を絞殺し、彼の一族の墓域に埋葬した。そこはアテナ神殿の境内にあり、入ってすぐ左手の神殿横にある。サイス人はサイス出身のすべての王たちをこの神殿境内に埋葬してきた。アマシス（第26王朝五代目の王）の墓も神殿本体から少し離れた境内にあり、巨大な石製の柱廊とナツメヤシをかたどった柱などで飾られていた。柱廊内部の二重の扉の向こう側に玄室がある。」（ヘロドトス『歴史』第2巻169）

「サイスのアテナ神殿の裏にはオシリスの墓がある。神殿の周壁内には数本の巨大なオベリスクと周囲に石を敷き詰めた池がある。この池で夜にイシスの受難劇が実施されるが、エジプト人たちはそれを秘儀と呼んでいる。この秘儀について、私は詳細を知ってはいるが、今は口外を避けようと思う。」（ヘロドトス『歴史』第2巻170-171）

¹ M. A. Jucha, *Tell El-farkha II: The Pottery of the Predynastic Settlement (Phases 2 to 5)* (Kraków-Poznań, 2005); K. M. Ciałowicz, R. Słaboński, P. Kołodziejczyk (eds.), *Ivory and Gold: Beginnings of the Egyptian Art* (Poznań, 2007); M. Chłodnicki, Ciałowicz, A. Mączyńska (eds.), *Tell El-Farkha I: Excavations 1998-2011* (Kraków-Poznań, 2012); Chłodnicki, Ciałowicz, Mączyńska (eds.), *Tell El-Farkha / Tell El-Farcha: 20 Years of Polish Excavations / 20 Lat Polskich Wykopalisk* (Kraków-Poznań, 2019).

² P. Wilson, *Sais I: The Ramesside-Third Intermediate Period at Kom Rebwa* (London, 2011); *Ibid.*, *Sais II: The Prehistoric Period at Sa el-Hagar* (London, 2014).

³ ヘロドトス著、松平千秋訳『歴史』上、岩波書店、2007年、312-313頁。

ヘロドトスの意味深長な言い回しは別として、サイスには複数の王墓を包含する女神アテナの聖域があり、そこには柱廊と巨大な柱が建っていたことが記されている。さらに聖池もあり、そこで秘密の祭祀が執り行われていたというのである。紀元後1世紀のプルタルコスも『イシスとオシリス』のなかで、サイスにある巨大なイシス（アテナイ）神殿について紹介している⁴。ギリシア・ローマ世界において、サイスにある女神の神殿は広く知られた存在であった。

サイスでは1997年以来、イギリスのダラム大学のP. ウィルソン率いる調査隊が発掘を続け、一定の成果を挙げているが、上記の記述を実証するまでには至っていない。一方、そのサイスに比べてバハバイト・エル＝ハジャルに関する記述は極端に少ない。バハバイト・エル＝ハジャルの名前が史料に現れた最初の例は新王国時代であるが、古王国時代の初めにはエジプト最古のイシス神殿が建造されていたと考えられている⁵。第三中間期には、オシリス信仰を暗示するパピルス文書の文脈のなかにおいて、バハバイト・エル＝ハジャルの別名セト・ウアフ・イケト（Set-wah-ikhet）として登場している⁶。つまり、第30王朝にイシス神殿が再建造される以前の歴史がバハバイト・エル＝ハジャルには間違いなくあったはずなのだ。しかしながら現時点ではほとんど知られていないのである。

現段階において、バハバイト・エル＝ハジャルのイシス神殿は、遺跡内で確認されている最も古い王名を根拠として、第30王朝三代目にして最後の王ネクタネボ2世によって建造が開始されたと考えられている。ネクタネボ2世はまた最後のエジプト人古代エジプト王としても知られた存在であった。その後紀元前360年から紀元前221年には、プトレマイオス2世とプトレマイオス3世が神殿の装飾部分を完成させている。ネクタネボ2世の名前が彫られた石材から、紀元前4世紀中頃にはイシス神殿が建設されていたことは間違いない。ただし現在の遺構以前に同じ場所に神殿が建造されていた可能性が考えられることから、先述したようにイシス神殿の建立は、古王国時代まで遡る可能性は十分にある。

D. アーノルドは、第26王朝最後の王アマシス（アハモセ2世）がすでにバハバイト・エル＝ハジャルの同じ場所に神殿を建造していたとしている⁷。このイシス神殿は紀元前2世紀に崩壊したかもしれないと考えられることもあるが可能性は低い。ドミティアヌス帝の治世（紀元後81-96年）に改修が行われており、紀元後1世紀以降のどこかの時点で現在見られるように修復を諦めさせるほど神殿が崩壊したに違いないからである。しかしその原因が

⁴ ディオドロス、ポンポニウス・メラ、プルタルコス著、飯尾都人訳編『ディオドロス神代地誌〔訳注・解説・索引付〕、龍溪書舎、1999年、596-597頁。

⁵ C. Favard-Meeks, The Present State of the Site of Behbeit el-Hagar, *British Museum Studies in Ancient Egypt and Sudan* 3 (2002), p.33.

⁶ Favard-Meeks, *Le temple de Behbeit el-Hagara: Essai de reconstitution et d'interprétation* (Hamburg, 1991), pp.58, 161, 401-433; K. A. Bard (eds.), *Encyclopedia of the Archaeology of Ancient Egypt* (London, 1999), p.165.

⁷ D. Arnold, *Temples of the Last Pharaohs* (Oxford, 1999), p.84.

自然災害であったのか、人為的なものであったのかすらいまだ明らかにされていない。

硬質の花崗岩製の神殿であり、少なくともネクタネボ2世からドミティアヌス帝までの約450年間、バハバイト・エル＝ハジャルに建ち続けたイシス神殿が崩壊するには、キリスト教徒やイスラーム教徒による宗教的高揚を背景とするような人的な破壊行為だけでは説明がつかない。それ以上の破壊力を持つ未曾有の自然災害がこの神殿を襲った可能性が高い。大地震とそれに伴う津波が神殿の崩壊をもたらしたと考えるのが妥当であろう。あるいは津波が引き起こした大洪水もまた可能性の一つと考えられる。紀元前1世紀のディオドロス・シクルスは、ギリシア人たちを滅亡へと追いやった洪水伝説について語る際にサイズを例として取り上げながら次のように述べている⁸。

「アテナイ人も、同じくエジプトに都市サイズを建設したのに、洪水が原因で同じく無知に陥ったのである。」(ディオドロス・シクルス『歴史叢書』第5巻57)

エジプトを含む東地中海世界は、古来大地震を幾度も経験してきた地域である。それゆえの地震がバハバイト・エル＝ハジャルのイシス神殿を破壊したのかを特定することは難しい。しかし上述したように、ドミティアヌス帝による改修が紀元後1世紀頃と考えられることから、神殿の崩壊はそれ以降のものであり、紀元後365年に起った地震である可能性が最も高いと思われる。それはこの地震がマグニチュード8.3~8.5という極めて大規模なものであったからだ⁹。なおかつその地震が誘発した大津波がクレタ島、シチリア島、アルバニア、トルコ、リビア、そしてエジプトを襲ったことが分かっているからである¹⁰。この紀元後365年に東地中海一帯を襲った大地震とそれともなう大津波は、地震から約25年後にローマの歴史家アンミアヌス・マルケッリヌスによって書き残された記述によって証明されている。それによると「激震の後、海の水が引き、海底が露出したが、その後大量の海水が戻ってきて人々を飲み込んだ。巨大な船が建物の屋根に乗ったり、海岸から3キロメートルにまで持って行かれたりした」とある¹¹。後の時代に『年代記』を

⁸ ポンポニウス・メラ、ディオドロス、プルタルコス、前掲書、435頁。

⁹ K. D. Fischer and A. Babeyko, *Modelling the 365 AD Crete Earthquake and its Tsunami*, Geophysical Research Abstracts, Vol. 9 (2007); B. Shaw, N. N. Ambraseys, P. C. England, M. A. Floyd, G. J. Gorman, T. F. G. Higham, J. A. Jackson, J.-M. Nocquet, C. C. Pain and M. D. Piggott, Eastern Mediterranean tectonics and tsunami hazard inferred from the AD 365 earthquake, *Nature Geoscience* 1 (2008), p.270; E. Papadimitriou and V. Karakostas, Rupture model of the great AD 365 Crete Earthquake in the Southwestern Part of the Hellenic Arc, *Acta Geophysica* 56-2 (2008), pp.295-296; S. C. Stiros, The 8.5p magnitude, AD365 earthquake in Crete: Coastal Uplift, Topograph Changes, Archaeological and Historical Signature, *Quaternary International* 216 (2010), pp.54-63; 大角恒雄、福島康宏「統計的グリーン関数を用いたAD365年クレタ沖地震動の推定」『土木学会論文集』71-4 (2015)、69-70頁。

¹⁰ S. L. Soloviev, O. N. Solovieva, C. N. Go, K. S. Kim and N. A. Shchetnikov, *Tsunamis in the Mediterranean Sea 2000 B. C. -2000 A. D.* (London, 2010), p.29; 山沢孝至「紀元365年7月21日、東地中海の大津波—文献史料を中心に—」『地域創造学研究』22 (2014)、27-52頁。

¹¹ 詳細な訳は以下の論文に詳しい。山沢、前掲論文、28-29頁。

著した紀元後9世紀のビザンツの歴史家ゲオルギオス・モナコスは、この地震と津波によってアレクサンドリアの内陸180スタディオン（約33キロメートル）まで船が運ばれたと記述を残している¹²。おそらくこれは誇張であろうと考えられるが、紀元後365年の大津波の凄まじさを当時のアレクサンドリアの人々の記憶にまだ残していたという意味では重要である。この紀元後365年の地震に関しては、さらに複数の叙述が残されていることから¹³、実際に起こった出来事であった点に疑問の余地は無いであろう。地震発生90分後には、1メートル程度の波がアレクサンドリアにまで到達したというシミュレーション結果も公開されている¹⁴。ただバハバイト・エル＝ハジャルのイシス神殿を破壊した原因としては、紀元後365年の前後である紀元後320年と紀元後376年にもアレクサンドリアを大地震が襲ったことから、半世紀の間に立て続けに起こった三つの巨大地震によって神殿は完全に崩壊したのかもしれない。そしてそれ以降、バハバイト・エル＝ハジャルのイシス神殿は、再建されることなく現代にまで至っているのである。

第二章：バハバイト・エル＝ハジャルの現状と研究史

地理的状況から考えると、バハバイト・エル＝ハジャルは、サマンヌードに近く、古代に大都市であったサイスとタニスに挟まれるような位置にあるため、間違いなくデルタ地域の拠点の一つとして長期間にわたり機能していたはずだ。たとえ古い時期には多くが沼沢地であり、小島のようなスペースを利用した居住地に人々が密集して暮らしていたとしても、デルタ地域における定住の始まりと宗教活動を検討する際に注目すべき場であること疑うべくもないのである。新王国時代後期のラメセス朝期には都ペル・ラメセスがデルタ東部に置かれるなど、その時期からプトレマイオス朝時代にかけてデルタ地域は隆盛する。

しかし現在、7.6ヘクタール（だいたい東京ドーム1.6個分）という規模の遺跡を訪ねても、バハバイト・エル＝ハジャルのイシス神殿は、完全に周辺世界とは孤立している感がある。その周りには、運河跡が確認されているが、現代の家屋が立ち並び農耕地が広がっているため遺構の全貌を見ることは難しい¹⁵。周りを見渡してみても遺跡を囲っている現代の壁と神殿本体の間にある境内には大量の壊れた石材が無造作に散らばっているのみである。しかし北側、南側、西側に日乾煉瓦製の周壁が一部確認できる（東側は完全に破壊されている）。周壁は210メートル×362メートル、厚さ18から20メートルで、18世紀末まではほぼ完全に周壁は残っていたことが当時の旅行者の記録等から知られている。

¹² 同、42頁。

¹³ F. Jacques et B. Bousquet, Le raz de marée du 21 juillet 365: du cataclysme local à la catastrophe cosmique, *Mélanges de l'École Française de Rome: Antiquité* 96 (1984), pp.456-460; 山沢、前掲論文、43頁。

¹⁴ Shaw, Ambraseys, England, Floyd, Gorman, Higham, Jackson, Nocquet, Pain and Piggott, *op.cit.*, p.271.

¹⁵ B. Porter & R. L. B. Moss, *Topographical Bibliography of Ancient Egyptian Hieroglyphic Texts, Reliefs and Paintings IV Lower and Middle Egypt* (Oxford, 2004), pp.40-42.

イシス神殿本体の神殿域は、約 80 メートル×約 55 メートルあり¹⁶、黒色あるいは濃い灰色の大小の花崗岩の石材を中心に珪岩と玄武岩、そして一部の柱は赤色花崗岩でできていた¹⁷。おそらく神殿に付属していた羨道に並べられていたであろうと思われるネクタネボ 2 世のスフィンクス像の一部が発見されていることから¹⁸、この神殿はルクソールのカルナク神殿でみられるように、両端に数多くのスフィンクスが一行に並べられた羨道を伴っていたはずだ。B. S. レスコーは、「バハバイト・エル＝ハジャルは、素晴らしいレリーフが施された美しい花崗岩で造られた巨大な神殿であったが、ほとんどのレリーフは剥ぎ取られ、倒壊した廃墟のようだ」と表現し¹⁹、K. ミシリヴィエッチは、バハバイト・エル＝ハジャルの現状について以下のように表現している²⁰。

「町の近くの農耕地の真ん中にプトレマイオス朝時代のレリーフが彫られた石材が転がっている。生い茂った草が遠い過去の威厳を醸し出す。石材の間隙はへびたちの棲家である。完全なる静寂がその遺跡の周りに漂う。沈黙だけが残っているのだろうか。その答えは考古学者たちのみぞ知るのだが・・・」

以上のようにバハバイト・エル＝ハジャルは、今や廃墟同然であるが、古の壮麗さ・巨大さは残存物から一目瞭然であったため、13 世紀以降この場所を訪れた旅行者による記録が残っているほど有名な場所であったのだ。なかでも司教で人類学者でもあった R. ポーコックは、1743 年に自著のなかで簡単なスケッチ（平面図）（図 2 参照）と共に次のように述べている²¹。

「バハバイト（バアルバイト）村は、おそらくデルタ地域の中央に存在していたとされるブシリスの跡地の上に建てられている。そこはイシス神のために建造された巨大な神殿で有名であった。神殿跡にはあらゆる高価な建材が散乱し、神殿自体は花崗岩で建造されていた。イシス神殿であった場所には、ヒエログリフが刻まれた建材や柱の柱頭が見られた。北東部分が低くなっている。私が描いた図によると、神殿の大きさは 200 フィート×100 フィート²² で遺構に建材が重なり合っている。ナイル河の水が入ってこないように、100 フィート離れたところに、神殿の周りに盛り土でマウンドを作って

¹⁶ Arnold, 1999, p.125; *ibid.*, *The Encyclopedia of Ancient Egyptian Architecture* (London, 2003), p.116.

¹⁷ Bard (eds.), *op.cit.*, p.167.

¹⁸ C. Favard-Meeks, *The Temple of Behbeit el-Hagara* in S. Quirke (ed.), *The Temple in Ancient Egypt: New Discoveries and Recent Research* (London, 1997), p.104 and pl.33b; Arnold, *op.cit.*, 2003, p.116.

¹⁹ B. S. Lesko, *The Great Goddesses of Egypt* (Oklahoma, 1999), p.182.

²⁰ K. Mysliwiec, *The Twilight of Ancient Egypt: First Millennium B. C. E.* (New York, 2000), p.173.

²¹ R. Pococke, *A Description of the East, and Some Other Countries* (1743), p.21; Favard-Meeks, *Le temple de Behbeit el-Hagara: Essai de reconstitution et d'interprétation* (Hamburg, 1991), pl.XXIV.

²² 1 フィートは 30.48 センチメートルなので、100 フィートは約 30 メートルとなる。

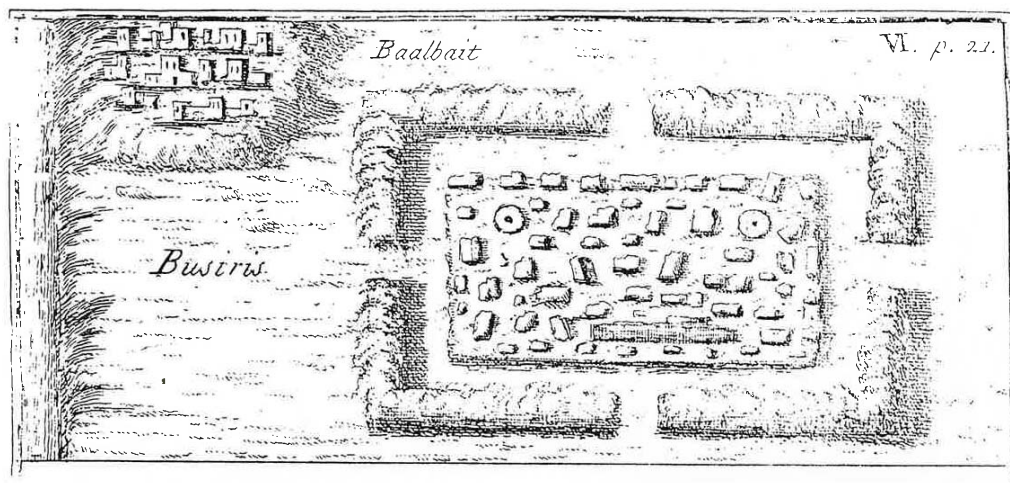


図2：バハバイト・エル＝ハジャルの平面スケッチ
(R. Pococke, *A Description of the East, and Some Other Countries* (1743), p.21)

いる。四面すべてに入り口を備えた神殿の壁の厚さは10フィートほどあり、外側部分はわずかに赤色が混じった灰色花崗岩で造られていた。内側は良質な赤色花崗岩製であった。石材の大きさを測ると、大半が長さ10フィートで幅は5フィートあり、ほとんどが壊れている柱は直径4フィートの赤色花崗岩製でイシスの頭部を模した柱頭を備えていた。それらは日々崩壊し、柱はマイルストーンに転用されている。12本の柱が四列に並んでいるように見えるが、目を引くのは刻まれたヒエログリフと4フィートの高さの石像……」

S. G. ウィルキンソンもまた1843年にバハバイト・エル＝ハジャルを訪れて記述を残している²³。

「バハバイト・エル＝ハジャルは古代のイセウムである。……イシス神を祀る町であり、ギリシア人やローマ人によって、イセイオンあるいはイセウムと名付けられたのである。エジプト人はヘバイあるいはヘバイトと呼んでいた。石が敷かれた参道を持つ周壁に囲まれたその神殿は、1,500フィート×1,000フィートの広い長方形の区画内に建造されていた。これはテメノス（神殿の境内）か聖域であり、ヘロドトスがブバスティスを描写した際に示したように樹木が植えられていた……。神殿本体は400フィートの長さ（あるいは外側の前庭まで含めると600フィート）で、幅が200フィート、そして赤色や灰色の高品質の花崗岩で造られ、沈み彫りや浮彫のある彫像などで埋め尽く

²³ G. Wilkinson, *Modern Egypt and Thebes: A description of Egypt* vol.1 (London, 1843), pp.434-437.

されていた。石材の多くは巨大で、神殿は完全に崩壊しており、割れた石材は元の場所から無理やり移動され、折り重なるように投げ捨てられていたが、以前の壮麗さを想像することは容易だった。・・・残る名前からプトレマイオス2世（フィラデルフォス）によって完成されたことがわかる。「ヘバイトの女主人」という肩書を持つ女神イシス、彼女の配偶者である「ヘバイトの主」たるオシリス、そしてアヌビス、ワニの頭部を持つ神ソベクがこの神殿に祀られた主たる神々であった。ただ残念なことに完全に破壊されてしまっている・・・」

現代に入ってから調査としては、1940年代と1950年代初頭にタニスの王墓の発見で知られるP.モンテによる調査隊が大量の石材を神殿本体の南東隅で見つけているが²⁴、そこからバハバイト・エル＝ハジャルおよびイシス神殿の全体像をつかむのは難しい。また現在、遺跡内にみられるラメセス朝期の石材の幾つかは、タニスなどの周辺遺跡から持ち込まれたものである点にも注意が必要である。

その後フランス人エジプト学者のC.ファヴァー＝ミークスによって調査が1990年代に実施されたが、2002年に彼女が現状報告を行って以降大きな進展はない。その際の彼女による遺跡の現状についての報告は大方以下のようなものであった²⁵。

- ①入口に立ち南側には古代の壁あり、その向こうに現代の壁がある。
- ②東側には畑があり、現代の壁の外側にある神殿は現在完全に家屋に囲まれている。
- ③西側には遺跡上に家屋が造られており、遺跡の半分は現在では失われてしまった。
- ④壁の外面部分は崩れており危険である。
- ⑤遺跡内部に雑草が多く塩害も見られる。
- ⑥花崗岩の建材（特にレリーフや碑文をともなうものに顕著）の劣化が激しい。

ファヴァー＝ミークスによる見解は、本章の冒頭で述べた現状とほぼ一致する。考古学の発掘現場としては、かなり厳しい状況ではあるが、現代の著しい開発の波と農業大国であるエジプトの現状を鑑みると致し方がないのであろう。バハバイト・エル＝ハジャル周辺の土地は豊かであり、人口は増加傾向にある。以上のような理由のため、モンテによってなされた神殿の南東角以外はいまだ大規模な組織的発掘調査は行われていないのである。

しかし我々はエジプトが世界屈指の観光立国であることを忘れてはならない²⁶。デルタ地域の観光資源は、ピラミッドを包含するギザやサッカラ、あるいはルクソールの神殿遺

²⁴ Favard-Meeks, *op.cit.*, 1997, p.103.

²⁵ Favard-Meeks, *op.cit.*, 2002, pp.31-41.

²⁶ M. Khater, M. Ohshiro and W. Omran, *Tourism Planning in Practice at the Site of Tuna El-Gebel, Egypt, Al-Rafidan* XLI (2020), pp.1-20.

跡群と王家の谷と比較すると現状では格段に劣る。アレクサンドリアを除けば観光不毛の地とさえ言えよう(そして「アラブの春」以降、コロナ禍以降はさらに深刻だ)。バハバイト・エル＝ハジャルのイシス神殿の発掘を含む総合的な調査とその後の復元作業は、デルタ地域における西のサイス(古王国時代の文化芸術を理想とした文化復興期であるサイス・ルネサンスを生み出した第26王朝の都)と東のタニス(プセンネ1世の未盗掘墓と同時期のリビア人エジプト王たちのネクロポリスの発見で知られている)をつなぐことで、新たに生み出されるエジプトの第三の観光資源を創出する可能性を秘めている。たとえばエジプト国内で最も良く知られたイシス神殿は、アスワンのフィラエ島にあるが、その知名度は保存状態の良さにある。ゆえに人々はクルーズ船でナイル河を遡ってまでわざわざファルーカに乗り込みフィラエ島を訪れるのだ。一方バハバイト・エル＝ハジャルのイシス神殿は、本来の規模においてはフィラエを凌駕するが、現在は完全に崩壊してしまっている。しかし崩れてはいるが、石材はかなり現位置で残存している。そして現状からもデンドラの神殿と類似する構造であったと推察できるのである²⁷。それゆえ、将来的に復元できる可能性は残されていると言えよう。

石灰岩よりも硬質で良質の花崗岩製の建材の再利用のために行われた略奪行為が神殿を最終的に今のような形にした最大の原因と考えられることも多いが、前章で述べたように、それ以前に歴史の流れのなかでエジプトが被った大自然災害の影響がこの壮麗なイシス神殿にまでおよんだ可能性がある。今後、人類史的視野で検討されるべき「自然災害」や「環境破壊」という観点からの議論もまたバハバイト・エル＝ハジャルを研究する大いなる意義なのである。その意味では、紀元前5世紀から紀元前4世紀のギリシアの哲学者プラトンが、サイスのエジプト人神官からソロンが伝え聞いた話を『ティマイオス』のなかで記したとされるかの有名な文言は、バハバイト・エル＝ハジャルを理解する上で密かに重要性を帯びてくるのだ。

「しかし後に、異常な大地震と大洪水が度重なって起こった時、過酷な日がやって来て、その一昼夜の間に、あなた方(アテナイ人)の国の戦士はすべて、一挙にして大地に呑み込まれ、またアトランティス島も同じようにして、海中に没して姿を消してしまったのであった。」(Tim.25D)²⁸

「謎の大陸アトランティス」について、本論で議論するつもりはないが、自然災害が文明・文化の壊滅に決定的な役割を果たしてしまう例として、このプラトンの言葉は示唆的だ。そしてそれはまたバハバイト・エル＝ハジャルにも当てはまるのかもしれないのである。

²⁷ Arnold, *op.cit.*, 2003, p.116.

²⁸ 庄子大亮『アトランティス・ミステリー』PHP研究所、2009年、35-36頁

第三章：地中海世界のイシス信仰

パハバイト・エル＝ハジャルで崇拜されたイシス神は、先述したようにオシリスの妻であり妹、そして古代エジプト王の化身であるホルス神の母であった。それゆえイシス神は、古代エジプトの王権理念において大きな役割を果たしたのである。このことはイシス神が「オシリス神話」のなかで、弟のセト神によって殺害された兄オシリス神を復活させて冥界の王としたり、息子ホルスに仇のセトを倒させて王位を篡奪させたことからわかる。それはまたイシスの名前（あるいは図像の頭上）に玉座を意味するヒエログリフが添えられていることから明白なのである。イシス（古代エジプト名はアセト）は、古代エジプト史の早期から存在が知られていた神であったが、その起源は不明とされている。シュメール以来、メソポタミアとシリア・パレスティナで知られるイナンナ、イシュタル、アスタルテなどとの関係も指摘されているが確実ではない。ギリシア・ローマ時代にアフロディーテ、テューケー、フォルトゥーナ、ヴィーナスと同一視されることを考えると、「イシス」はその呼び名自体が重要なのではなく、あらゆる時代・地域における「女神の代名詞」であったという理解が妥当であろう。

それゆえイシスは人間の姿で描かれ、しばしば幼児のホルスを両腕に抱き、授乳する「母親」の様子で表現されたのだ。「イシス、呪術において偉大なる者」として、彼女は治癒力を持ち、子供に対する保護者となると信じられていた。強い母親を連想させるイシスは、同じく強力な母性を備え持つ愛の女神ハトホルと関連づけられ、新王国時代以降、しばしばウシの角の間に太陽円盤を備えて表現された。後の時代、彼女への崇拜は、息子ホルスに授乳しているイシス神の図像とともに古代ローマ帝国中に拡大し、イエスを抱くマリア像の原型としてキリスト教時代にも継承されていったのである。王朝時代が終焉を迎え、古代エジプトがその本来の姿を喪失しつつあった時期でさえも、イシス信仰は神秘的な「イシスの秘儀」や「航海の守護神」という要素とともに、デメテルと同一視されつつ古代ローマ帝国全域に拡大したのである。イシス神は自然を体現する存在、またはイシス神を祖型とする普遍的な無数の女神の母体となり、地域や時代、あるいは持ち物や外観などによって様々な名称で呼ばれながら各地で定着していく。

おそらくそのような宗教的動向の一例として、パハバイト・エル＝ハジャルの建材の一部は、紀元後1世紀にエジプトからローマにあるイシス・セラピス神殿（第三代ローマ皇帝のカリグラによって再建されたカンプス・マルティウスにあるカンプス・イセウム）へと運ばれ²⁹、古代エジプトの宗教であったイシス信仰のローマ世界における拡大に貢献したのである。同時期には南イタリアのポンペイにイシス神殿（図3参照）が建立され、紀元後215年にはローマの七丘の一つクイリナーレの丘にカラカラ帝がイシス神殿（あるいはイシスの夫オシリスと同一視されたセラピス神も同時に奉じたイシス・セラピス神

²⁹ Arnold, *op.cit.*, 1999, p.125; R. H. Wilkinson, *The Complete Temples of Ancient Egypt* (London, 2000), p.105; 小川英雄『ローマ帝国の神々ー光はオリエントよりー』中央公論新社、2003年、41-42頁。



図3：ポンペイのイシス神殿（著者撮影）

殿）を建造している³⁰。ローマの七丘のようなローマの中心地だけではなく、古代ローマ帝国領各地にもイシス神殿は複数建造されたのである。

古代ローマ帝国において、そのような地中海を挟んでの南北地域による文化接触の結果として生まれたものに、いわゆる「ナイル河風景画」（図4参照）がある³¹。ポンペイから出土した複数の例が良く知られているが、最大規模のものがパレストリーナ（古代名はプラエネステ）のナイルモザイク画（図5参照）である³²。パレストリーナは、ローマから東へ約35キロメートルに位置する町で、運命の女神フォルトゥーナの神殿があることで知られている（つまり、フォルトゥーナ信仰の存在は、イシスを受容する背景をパレストリーナがもともと有していたことを意味するであろう）。その神殿の床にあったと考えられているのが、件のモザイク画である。このモザイク画は、幅5.85メートルで高さが4.31メートルもある巨大なものであり、紀元前2世紀から1世紀頃に作製されたと考えられている。下半分にエジプト風神殿が幾つか描かれており、このモザイク画の研究で名高いP. G. P. メイブームは、モザイク画の中央部の向かって左側に描かれたものがアスワンのフィラエ島にあるイシス神殿であり³³、このモザイク画全体はナイル河の南方からデルタ地域へと流れるナイル河とその河岸風景を描いたのだと考えている。もしそうであるならば、その反対の位置（向かって右側）にある神殿は、規模の大きさからアムン神を奉じたカルナ

³⁰ ユルギス・バルトルシャイディス著、有田忠郎訳『イシス探究—ある神話の伝承をめぐる試論—』国書刊行会、1992年、8頁。

³¹ 大城道則『古代エジプト文化の形成と拡散—ナイル世界と東地中海世界—』ミネルヴァ書房、2003年、187-209頁。

³² S. Walker, Carry-on at Canopus: The Nilotic Mosaic from Palestrina and Roman Attitudes to Egypt, in R. Matthews and C. Roemer (eds.), *Ancient Perspectives on Egypt* (London, 2003), 191-202; 大城道則、田中宏幸『ミュオグラフィ—ピラミッドの謎を解く21世紀の鍵—』丸善出版、2017年、93-94頁。

³³ P. G. P. Meyboom, *The Nile Mosaic of Palestrina Early Evidence of Egyptian Religion in Italy* (Leiden, 1995), p.52.



図4：「ナイル河風景画」(著者撮影)

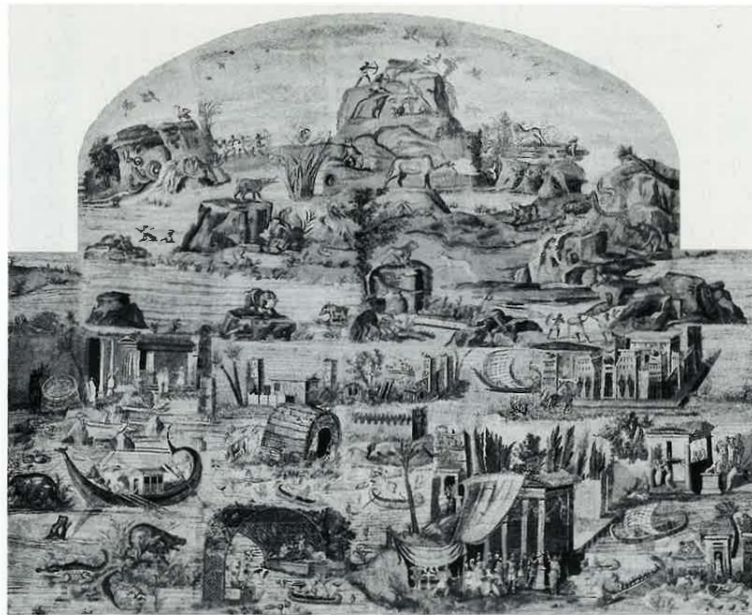


図5：パレストリーナのナイルモザイク画

(Meyboom, *The Nile Mosaic of Palestrina Early Evidence of Egyptian Religion in Italy* (Leiden, 1995), il.6)

ク神殿かルクソール神殿、あるいはメイブーンが提案するようにエドフのホルス神殿かアレクサンドリアのオシリス神殿をイメージしたものとなろう³⁴。

モザイク画のなかでナイル河はさらに蛇行しながら下エジプトへと流れていく。そこに

³⁴ Ibid., p.54.

もまた神殿が描かれている。向かって右下（モザイク画の下部の四分の一ほどを占める）に二つの神殿がある。上の神殿からは棺を担いだ人々が行列をなして神殿を出ようとしている様子が、下の神殿では入り口付近に兵士たちがたむろしている様子が描かれている。両神殿は連続きであるが、すぐ傍を流れるナイル河を航行する船が両神殿をつないでいるようにも思える。テーベで開催されたオペト祭のような儀礼、あるいはオシリス神話の一場面（姦計にはまり、棺に封じられたオシリスがナイル河に投げ込まれようとしている）を描いたのかもしれない。プルタルコスは、古代エジプトの神官たちが行うオシリス神の復活＝「春の到来」を願う儀礼のなかで人々の様子を以下のように描いている³⁵。

「第3月第19日の夜になると神官たちは岸辺に向い、神像の世話役の神官たちはなかに黄金製の小箱が入った聖なる箱を運び出す。そして持参した水を箱に注ぐのである。すると、「オシリスが見つかった」と歓喜の声を上げるのだ。続いて豊かな土と水を香料とともに練り合わせ三日月形の像を作り、その像に衣装を着させて、化粧を施すのである。土と水から創り出された存在は彼らにとって神そのものであったのだ。」（プルタルコス『イシスとオシリス』第39節）

この儀礼の描写のなかの「聖なる箱」とは棺であり、なかの黄金製の小箱はオシリスを意味している（棺のなかはオシリスをイメージさせるものならミイラでも王冠でも王笏でも何でも良かった。たとえばルーブル美術館所蔵のパピルス・ジュミアック（Papyrus Jumilhac）に描かれた四角い棺のなかには、オシリスの体液を表現した水差しが描かれている³⁶）。死したオシリスがイシスの魔力で蘇り、その後再び死んで冥界の王として復活を果たす神話にちなんだロールプレイング的な儀礼であったのかもしれない。ヘリオポリスの九柱神のなかの一柱としてのイシスではなく、「オシリス神話」のなかのイシス神こそがローマ帝国支配下のエジプトにおけるイシス神の役割なのだ。バハバイト・エル＝ハジャルにイシス神殿が存在する理由もまた「オシリス神話」にある。

第四章：バハバイト・エル＝ハジャルのイシス神殿の持つ意味

バハバイト・エル＝ハジャルとそこに建造されたイシス神殿の歴史はいまだ良く分かっていない。その最大の原因は組織的・総合的な発掘調査がなされていないことにある。平面図（図6参照）が示されたり、復元図（図7参照）が製作されたりしているが³⁷、いずれも不確定要素が多く暫定的なものでしかないのである。

³⁵ プルタルコス著、柳沼重剛訳『エジプト神イシスとオシリスの伝説について』岩波書店、1996年、77頁；ディオドロス、ポンポニウス・メラ、プルタルコス、前掲書、602頁。

³⁶ Louvre collections E17110 (papyrus funéraire ; papyrus Jumilhac - Louvre Collections) 参照（最終閲覧日：2022年10月27日）。

³⁷ Favard-Meeks, *op.cit.*, 1991, pl.I; Wilkinson, *op.cit.*, p.104 (bottom).

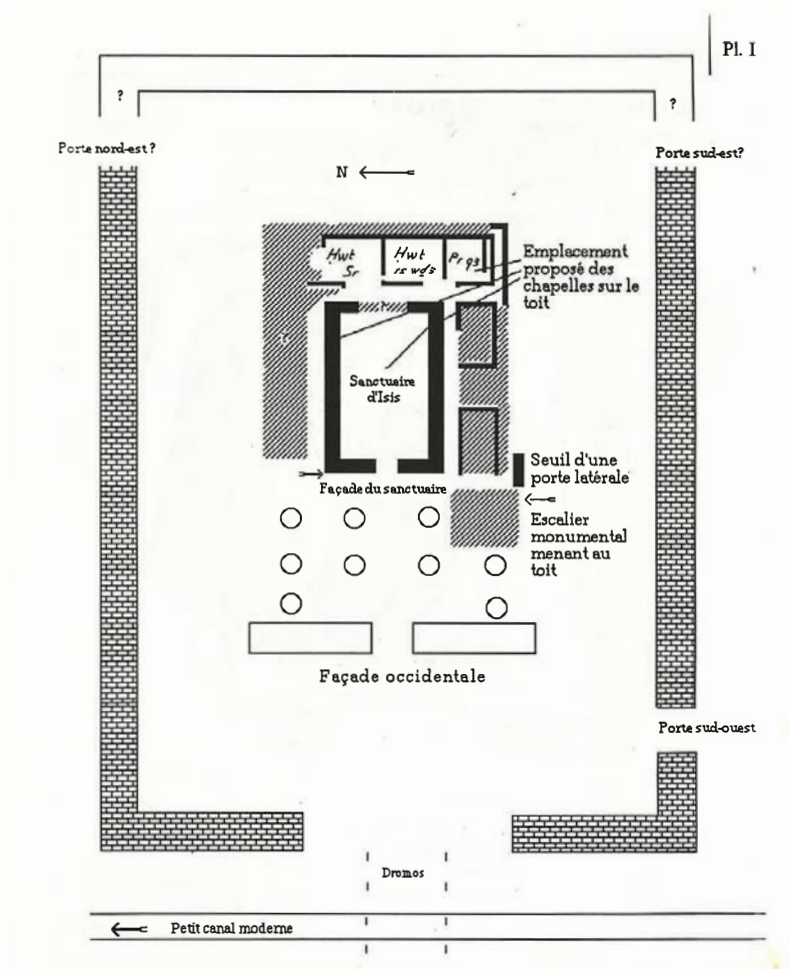


図6：バハバイト・エル＝ハジャルのイシス神殿平面図

(Favard-Meeks, *Le temple de Behbeit el-Hagara: Essai de reconstitution et d'interprétation* (Hamburg, 1991), pl.I.)

ただ「ハバイトの女主人イシス」という文言が碑文に存在することから³⁸、イシス神崇拜の拠点であった点は間違いない。ネクタネボ2世が神殿の基礎を建造したとされるが、前述したようにおそらくそれ以前の段階でもっと古い神殿があったと考えられる。ネクタネボ2世は現在遺構が確認できるイシス神殿を建造した人物であるが、最初に建造に着手した人物ではない可能性が高いのである。アラビア語名であるバハバイト・エル＝ハジャルのバハバイトは、「祝祭の女神の家」を意味する古代エジプト語の地名である「ペル・ハバイト」に由来する³⁹。また「ペル・ハバイト」のハバイトは、ウセクト・ハバイト(wesekhet

³⁸ Bard (eds.), *op.cit.*,1999, p.167.

³⁹ Favard-Meeks, *op.cit.*,1991, p.434; *Ibid.*, 1997, p.102; S. Snape, *The Complete Cities of Ancient Egypt* (London, 2014) (ステューブン・スネイプ著、大城道則監訳『古代エジプト都市百科—王と神と民衆の生活—』終風舎、2015年)、p.195.

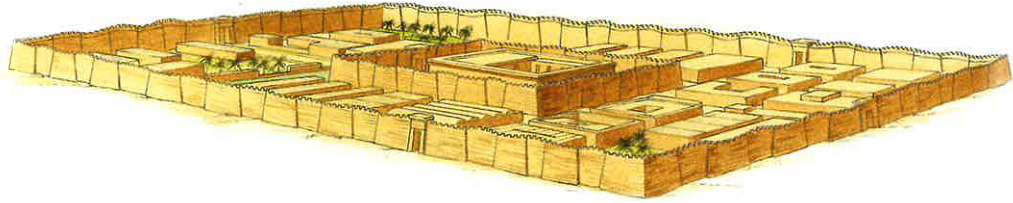


図7：バハバイト・エル＝ハジャルのイシス神殿復元図
(R. H. Wilkinson, *The Complete Temples of Ancient Egypt* (London, 2000), p.104)

hebit) の略語であり、新王国時代以降、イシス神殿は、人々が神へ供物や彫像などの捧げものをしたり、何らかの祭祀が行われた祝祭用広場に使用された空間として機能した。ハジャルはアラビア語で「石」を指す単語であり、おそらくサ・エル＝ハジャル（サイス）やサン・エル＝ハジャル（タニス）同様、「廃墟」という意味を表現するために近現代に付け加えられたものであろう。イシス神殿自体に関しては情報がほとんどないが、地名としてペル・ハバイトとハバイトは、新王国時代のアメンホテプ3世治世以降しばしば言及されている⁴⁰。

なかでも重要なのが紀元前5世紀にヘロドトスが当時のエジプトの都サイスについて語る文脈のなかで、バハバイト・エル＝ハジャルと想定できる町が登場することだ（ヘロドトスはプシリスにイシス神殿があると記しているが、これはプシリス（古代名はアンジェティ）から南に17キロメートルと近いバハバイト・エル＝ハジャルのことであろう）。そこで行われた祝祭は、エジプト最高の女神イシスのための、エジプト最大の祭りであるとされ、そこには巨大なイシス神殿があり、生贄の儀礼が重要な役割を果たしていたことが紹介されているのである。

「犠牲獣の内臓を取り出して焼く方法は、それぞれの犠牲式によって異なる。そこでここには、エジプトで最高の神と崇められる女神のために祝われる、これまたエジプト最大の祭りについて述べることにしよう。ウシの皮を剥ぐと祈願したのち、はらわたをすっきり取り出し、他の内臓と脂身はそのまま体内に残し、四肢、尾骶骨、肩、頸部を切り取ってしまう。こうしてから残ったウシの胴体に清浄なパン、蜂蜜、ブドウ酒、いちじく、乳香、没薬その他の香料を詰め、その上でオリーブ油をたっぷりかけて焼くのである。エジプト人は犠牲式を行なう時はあらかじめ断食をする。生贄が焼ける間、一同は自分の体を打って哀悼の意をあらわす。打ち終わると生贄の残った部分で宴を張るのである。」（ヘロドトス『歴史』第2巻第40節）⁴¹

⁴⁰ Favard-Meeks, *op.cit.*, 1997, p.103.

⁴¹ ヘロドトス、前掲書、214-215頁。

また異なる箇所ではヘロドトスはこの祭りを当時エジプトで二番目に大きな祭りであるとして、以下のように紹介している。

「エジプト人は国民的大祭を年に一度だけ開くというわけではなく、大祭は頻繁に行われる。中でも最も盛大に行われるのは、アルテミスのためにブバステイスの町に集まって祝う祭りで、これに続いてはブシリスの町におけるイシスの祭りである。この町にはイシスの壮大な社があり、町そのものがエジプトのデルタの中央に位するのである。イシスはギリシアでいえばデメテルに当る。三番目に重要な大祭はサイスにおけるアテナの祭り、四番目はヘリオポリスにおけるヘリオスの祭り、五番目はプトにおけるレトの祭り、六番目はパプレミスにおけるアレスの祭りである。」(ヘロドトス『歴史』第2巻第59節)⁴²

ヘロドトスがイシスの祝祭が実施される場所をバハバイト・エル＝ハジャルではなくブシリスと紹介したのは、当時は両者が同じ都市域に存在しているのだと人々がみなしていたからであろう。ファヴァー＝ミークスが提案しているように、オシリス神を崇めるブシリスからオシリス神の神像がバハバイト・エル＝ハジャルのイシス神殿へと運ばれたのかもしれない(もちろんその逆も考えられる)⁴³。テーベのカルナク神殿からルクソール神殿へと妻ムト女神に逢うためにアムン神の神像が運ばれたオペト祭と同じような神々の聖なる結婚の儀礼がデルタ地域においても実施されていたと考えるのだ。ブシリスとバハバイト・エル＝ハジャルは約17キロメートル離れているが、神輿で神像を運ぶことは可能であったであろうし、両都市はナイル河沿いに位置していたことから、河を利用して船(聖船)で運んだ可能性も考えられるのである(おそらくパレストリーナのモザイク画に描かれたように)。ブシリスからオシリスの神像をナイル河に流して、バハバイト・エル＝ハジャルで拾い上げる聖なる儀礼が実施されていたのかもしれない。

バハバイト・エル＝ハジャルのイシス神殿自体は、遺跡内で発見された王名にネクタネボ2世のものがあることから、あるいはネクタネボ1世の家臣が建造に関わっていたことから⁴⁴、第30王朝(紀元前380-343年)の王によって建造が始まり、プトレマイオス3世(紀元前246-222年)の治世に完成したと考えられているが、紀元前5世紀のヘロドトスが記したイシス神殿がバハバイト・エル＝ハジャルのイシス神殿を指しているならば、やはりネクタネボ2世以前から神殿は存在していたことになる。

下エジプトのデルタ地帯にあったバハバイト・エル＝ハジャルのイシス神殿は、これまで上エジプトのアスワンにあるフィラエ島のイシス神殿としばしば比較されてきた。この南の信仰拠点の興隆とはほぼ同時期に、第30王朝、特にネクタネボ1世とネクタネボ2世

⁴² 同、229-230頁。

⁴³ Favard-Meeks, *op.cit.*, 1997, p.110.

⁴⁴ *Ibid.*, 1997, p.103.

の治世にバハバイト・エル＝ハジャルの重厚なイシス神殿が増改築されたことで、イシス信仰の影響圏は、エジプトの南の国境である第一カタラクト近くのフィラエのイシス神殿と北のデルタ地域とを挟み込むように全土を包囲する形となったのだ。当時のナイル世界は南北二つのイシス神殿によって呪術的に守られた地域であったのである。

おわりに

バハバイト・エル＝ハジャルは、二千年間イシス女神を祀る聖地であり続けた。その長い期間をもたらしたのは、女神イシスが普遍的な要素を多分に備えた神であったことから広く伝播し、深く人々に受け入れられた点が最大の要因であろう。またイシスの配偶者オシリス神の存在も一つの要因であったと考えられる。ヘロドトスがバハバイト・エル＝ハジャルをオシリス神に名前が由来するプシリス（現在のアブシール・バナ）であると記したのは、この地がイシス神殿を中心としたイシス信仰だけではなく、オシリス信仰の拠点でもあったからなのかもしれない。バハバイト・エル＝ハジャルは、古代エジプトのみならず、地中海世界全域で最も良く知られた夫婦神の信仰地であったのであろう。もしそうであるならば、この地でオシリス神とイシス神の物語である「オシリス神話」が果たした役割について検討すべきであり、バハバイト・エル＝ハジャルが神々の王と王妃の信仰の地であったことから、プトレマイオス朝の王族たちの葬送に関する存在意義を持っていた可能性もある。その地において祝祭が誕生したのである。ナイル世界の神であったイシス神が地母神の範疇を超越して世界化していく過程には、デルタ地域に存在し、当時地中海世界へと開かれていたバハバイト・エル＝ハジャルのイシス神殿で開催された祝祭とその長い伝統が大きく貢献したのである。

その上、宗教拠点としてのバハバイト・エル＝ハジャルの持つ意味からは、古代エジプトにおける遷都や王墓地の移動の背景に強い宗教的要素が存在していた可能性を読み取ることができるかもしれない。太陽円盤アテンを唯一神として奉じた新王国時代のアクエンアテン王による新都アマルナへの遷都は言うに及ばず、デルタの王都メル・ラメセスへの遷都、古王国時代に起こったサッカラからメイドウムとダハシュールを経由してのギザへの王墓地移動の背景にも古代エジプト独自の神々に対する信仰が大きく作用していた可能性がある。古代エジプトの都市の形成過程には、人々の神々に対する熱狂的で継続的な崇拝という心理的要素が大きな役割を果たしたのである。

謝辞

本稿は JSPS 科研費 22H00721（基盤研究（B）、研究課題名：メイドウム遺跡を軸とするエジプトの古王国時代における王墓地変遷問題の研究、研究代表者：大城道則）による研究成果の一部である。